

令和二年度 学力検査問題

国語

（九時二十五分～十時十五分）
（五十時間）

受検番号	第	番
------	---	---

注 意

1 解答用紙について

- (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
- (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。
- (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
- (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
- (5) 解答用紙の※印は集計のためのもので、解答には関係ありません。

2 問題用紙について

- (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
- (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十三ページです。

○ 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

同じ中学に通う鈴川有季と森田麻友が職場体験をしている地域の図書館に、二人の共通の知人である読書家の老人、七曲直が現れ、所有する二千冊の本を寄贈することを申し出るが、図書館職員（こうじり）の河尻利香子に断られる。翌日、有季と麻友は、以前から本の一部を引き取る約束をしていた七曲の家を訪れた。

「七曲さん。」

呼んでも、七曲はふり返りもしないし返事もしない。

麻友は居心地が悪そうに有季と七曲を見比べたあと、周囲を見回し、廊下の壁沿いの本棚の方へすうっと近寄っていく。自分は邪魔しないから、存分にやってくれといわれている気がした。

しかし有季にしても、拗ね（さ）ている七曲に、利香子の苦悩や図書館の実態を上手く説明できるか分からない。けれど、伝えなければならぬと思うのは、七曲も利香子も、おなじ本を愛している者同士が、互いを誤解したままなのは哀しいと思うからだ。

「僕、昨日七曲さんと話をした河尻さんに、色々教えてもらったんです。図書館の書庫はもう、今でも溢（あふ）れるほどに本があつて、一冊増やすのすら大変なんだって。だから簡単に寄贈を受け入れられないんです。」

夕方のオレンジ色の光が、七曲の背中の方へうつすら射（さ）しこんでいる。彼の周りに、きらきら埃（ほこり）の粒が舞っているのが見えた。

「図書館には、図書館の役割があつて。それで、図書館の人たちは、そのために一生懸命仕事していて。」

そこまで話したところで、有季は言葉に迷った。^①「だから結局、寄贈を受け付けられない。大人として図書館のシステムを守る使命があるから、河尻さんも理性で感情を殺して仕事しているのだ。」と。そんなことを七曲に言っても、意味がない気がしたのだ。

もし七曲が『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンに似ているとしたら、そんな大人の理屈など百も承知で、それでも心がそれを受け入れられないで腹を立てたり哀しんだりしているとしたら、有季が語る大人の事情や苦悩なんかは、七曲の気持ちを宥（なだ）める役には立たない。

（じゃあ、どうすればいいんだろう。）

利香子はホールデンのことを純粋さを必死で求めている、と言った。そんな人に対して、なにを言えばねじれた気持ちを慰められるのか、わからない。

暫く有季が沈黙していると、

「寄贈を受け付けてもらえないのは、別に良いんじゃない。」

背を向けたまま七曲が言った。有季の沈黙に、七曲の方が耐えられなくなったような、諦めたような声だった。

「それだけなら、そうか、じゃあ自力でなんとかすると、引き下がるだけで済んだんじゃない。」

七曲がなにを言いたいのかわからず、ちよつと間を置いてから有季は訊（き）いた。

「なにが問題だったんですか。」

「あの魔女は、本を廃棄すると言った。」

「でも別に、七曲さんの家に押しかけてきて、本を廃棄すると言ったわけじゃないんですよ？ 寄贈したら、その可能性があると言っただけで。」

②「俺の本を廃棄しなくても、誰かが持ち込んだ本は廃棄されるんじゃないが！」
ふり返った七曲の目には真剣な怒りがあつた。

「それは、そうでしょうけど。」

「図書館は、本の聖地みたいなもんじゃろうが。大昔の本から、新しい本まで、あらゆる種類の本

を取りそろえて保管しているなんぞ、天国じやろうが。その天国の番人が、本を廃棄すると抜かしたんじゃー！」

目をぎらつかせる七曲を見て、有季は悟った。七曲は怒っているのではなく、どちらかといえばショックを受けているのだ。彼の中で図書館が本の聖地と認識されているとするなら、そこに勤める人々も、七曲と同じく本を愛して止まない人だと信じていたのだろう。

しかしその人の口から「廃棄」の言葉を聞き、裏切られたような気がしたに違いない。図書館職員でさえ、簡単に本を捨てるのかと。

けれどそれは誤解だ。

「確かに、図書館では本を廃棄することがあるって聞きました。でも、それは好きこのんで廃棄するわけじゃなくて、やむを得ずなんです。本を捨てることに、すごく罪恶感があるって。」

「やむを得ずでも捨てるなら、同じじゃ。俺は捨てん！」

また、七曲は背中を向け、腕組みして押し黙る。

「七曲さん。」

呼んでみたが、ぴくりとも動かない。何度呼んでも、頑なな背中では反応しない。

（やっぱ無理か。）

諦めて、帰ろうかと思った。麻友を探してふり返ると、彼女の背中が廊下の方に見えた。「森田さん。」と呼ぶと、ひょこんと顔を覗かせた。「帰ろう。」と力なく告げると、彼女は頷き、こちらにやってくる。手には一冊の本がある。

麻友は有季のそばに來ると、七曲の背中に細い声で言った。

「七曲さん。これ、下さい。」

彼女が七曲の方へ向けて表紙を見せた本は、『ライ麦畑でつかまえて』だった。

それには七曲も反応してふり返り、表紙を認めて、少し嬉しそうな顔をした。

「おお、ええぞ。ええ本を選んだじゃないか。俺の好きな本じゃが、それは重複本があるからやる。どうして選んだ。近頃の若いのは、サリンジャーの名前も知らん奴が多いのに。」

手にある本の表紙を見おろし、麻友は呟く。

「七曲さんも、好きなんだ。」

「も？」

と、七曲が怪訝な顔を見ると、麻友は暫く考えるように間をあけてから、答えた。

「図書館の、河尻さんも好きだって。」

「あの魔女がか？」

麻友は頷く。

有季は、はっとした。

（そうか。七曲さんも『ライ麦畑でつかまえて』が好きなんだったら。）

本の妖怪にはなれないが、本の力を借りることならできるのではないか。

いじけた七曲の気持ちにも届けられる言葉を、有季も口にできるかもしれないと思えた。

「河尻さんはホールデンのことを、友だちにはなりたくないけど、むかついたりしないって言いました。『ホールデンの理想のように、人間が生きられたら幸せなんだろうね。ライ麦畑のつかまえ役なんて、本人も言ってたように、馬鹿げているけど幸せよね。』って、言っていました。」

眉間に寄っていた七曲の皺が、その言葉を聞いて余計に深くなった。しかし、それは不愉快というよりは、よく聞き取ろうとしている様子に思えた。

「僕はそれを聞いて、河尻さんにはホールデンと同じような理想があって、けれどホールデンと同じように、現実世界では理想通りに生きられないから、ホールデンの理想を羨ましがっているような気がして。だって。」

再び七曲が背を向ける隙を与えまいと、有季は必死に言葉を続けた。

「だって、河尻さんはホールデンみたいな高校生じゃないから。色々なことを堪えて、呑みこんでるのかもって。だから、ライ麦畑のつかまえ役が羨ましいんだらうって。本当は、本を選んで廃棄

することもしたくないし、新しい本だって出版されただけ全部図書館に入れたいのに、できないから。逆に、七曲さんみたいに、本を廃棄するって言われて、純粹に怒れる人が羨ましいのかもってだから。」

③ 一気にそこまで喋り、一つ息を吸い、言葉を紡ぐ。
「だから。河尻さんは、魔女なんかじゃないです。」

むっとした表情で、七曲は一点を見つめて黙っている。暫く沈黙が続いた。その沈黙が余りにも長すぎるので、有季は口を開く。

「僕も、ホールデンは好きじゃないけど。」

するとようやく、七曲が視線をあげた。

「おまえ、読んだのか。」

反応があつたことに、ほっとした。

「読みました。図書館で借りて。ホールデンは好きじゃないけど、でも感じてゐることは、よくわかる。ところもあつて。僕も、この本は好きです。」

すると七曲がついと、廊下の方を指さした。

「じゃあ、持って帰れ。あれは二、三冊あつたはずじゃ。もってけ。」

「良いんですか？」

「ただし、おまえが選んだ本じゃないから、おまえの持ち帰り予定の八十冊にはカウントされんぞ。」

「え、そんな！」

「じゃあ、いらんか。」

せつかく本を持ち帰るなら、ノルマの数にカウントして欲しいのが正直なところだった。けれど、『ライ麦畑でつかまえて』は、手元に置いておきたかった。なぜなら、それを読む自分の年齢によつて、感じるものが違うのではないかという予感が、強くしたからだ。もし、十年後、二十年後に読んだとき、自分が何を感じ取るのか、知りたかった。

「いえ、いります。もって帰ります。」

その答えを聞くと、七曲がにやつと笑った。

「まあ、あの図書館の魔女も許してやろう。二冊、本が減るのに貢献したようだからな。」

言葉の意味がわからず、きょとんとした。しかしすぐに理解した。理解した途端に、

「……あ。」

④ 思わず、有季は口元がゆるんだ。

（届いた。）

言葉が、本の力を借りて、腹を立てている七曲にも届いたのだ。

（僕の言葉が届いた。）

嬉しかった。そして本の力を借りたにせよ、七曲の心に言葉を届けられた自分が誇らしかった。

（三川みり著『君と読む場所』による。一部省略がある。）

（注）※『ライ麦畑でつかまえて』……J・D・サルンジャー（一九一九～二〇一〇）著。

主人公の高校生ホールデンがニューヨークの街をめぐる長編小説。

問1 有季は言葉に迷った。とありますが、このときの有季の様子を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 七曲ななまがりが怒りに任せ自分たちに返事すらしてくれないことに加えて、所在なさそうに協力を拒む麻友まゆに対して、言いようのないもどかしさを感じている。

イ 七曲が河尻こうじりの立場や図書館の大人の事情を知ること、最終的には理解してくれると大きな期待をしているが、今は何から話すか慎重になっている。

ウ　七曲のねじれてしまった気持ちを正せるようにと考えたが、怒っている大人を前にした緊張感から、言うべきことを忘れてしまい慌てている。

工七曲が、ただ大人の事情を知らずに怒っているのではないと考え、河尻や図書館側の事情を話ただけでは納得してもらえないと不安を感じている。

問② ふり返った七曲の目には真剣な怒りがあつた。とありますが、有季が考える七曲の心情はどのようなものですか。次の空欄にあてはまる内容を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。

図書館職員である河尻のことを、

40

という気持ち。

30

問3 ③ だから。河尻さんは、魔女なんかじゃないです。とありますが、このときの有季の考えを説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 河尻さんは 時として純粋な高校生のように振る舞いながらも、本を心から愛し、理想を高くもっている人だということ。

イ 河尻さんは 本の廃棄について罪悪感を感じながらも、図書館職員として理性に従い仕事をしている人だということ。

ウ　河尻さんは　本を愛しているながらも、本の廃棄については　仕事として行うことをためらわない人だということ。

工 河尻さんは、本を愛するという理想を追う生き方をしており、言葉にこだわりのもった、
の強い人だということ。

問2 次の――部と――部の関係が主・述の関係になっているものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

先週末、友達と映画館に行った。チケットを購入した後、飲み物と食べ物を買った。
映画はとても感動的で、一緒に行った友達も泣いていた。映画を鑑賞し終わった後、記念にパンフレットを買った。

問3 次の会話の空欄 I にあてはまる言葉を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

Aさん「辞書によると、I の本来の意味は『ある事をするための、ちょうどいい時期』とあります。こういう意味があることを、初めて知りました。」
Bさん「私は、I という言葉は、『ものごとの終わり』という意味だと思っていました。」

ア 終幕 イ 潮時 ウ 時事 エ 挙句

問4 次は、中学生のAさんが書いた、職場体験でお世話になった方々への【お礼の手紙の原稿】を用いて、グループで話し合いながら手紙を推敲する学習の一部です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

話し合いの様子

Aさん「【お礼の手紙の原稿】を見てください。これまで学習したことを思い出しながら、何か気づいたことがあったら、発言してください。」

Bさん「私は、季節に合わせた時候の挨拶が書けていてよいと思います。」

Cさん「私は、文末表現が気になります。文末表現は統一する、と学習したので、一か所直す必要がありますね。」

Aさん「なるほど、そうですね。では、他にはありますか。」

Dさん「私は、前文や本文の書き方がとてもよいと思います。ただ、手紙の最後には、日付や署名、宛名などの後付けを書くことと学習しました。この手紙の最後にも書いた方がよいと思います。」

Bさん「後付けは、入れるとしたら結語の後でしょうか。日付、署名、宛名などは書く位置についてにも注意する必要がありますね。」

話し合いが続く

拝啓

すがすがしい秋晴れが続いていますが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、先日の職場体験の際は、大変お世話になりました。

体験を通して、様々なことを教えていただいた。特に、勉強になったことは、お客様に接する際の心構えについてです。体験初日の私は、お店にいらっしゃったお客様に対して、心のこもった挨拶ができませんでした。しかし、働いている皆様から「おもてなしの心」について教えてもらい、「今の笑顔、よかったよ。」などと励ましていただいたおかげで、気持ちのよい挨拶ができるようになり、体験を最後まで笑顔でやり遂げることができました。

今回の経験を、今後の中学校生活にも生かしていきたいと思っています。

朝夕涼しくなってきましたが、皆様、お体を大切になさってください。

Ⅱ

- (1) 文末表現は統一する、と学習したので、一か所直す必要がありますね。とありますが、

【お礼の手紙の原稿】の中から適切でない一文節の文末表現を探し、八字で適切な文末表現に書き直しなさい。なお、句点も一字に数えます。(3点)

- (2) この手紙の最後にも書いた方がよいと思います。とありますが、この発言についての説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 直前の発言内容を自分なりの言葉でまとめている。

イ 課題点を明確にするため繰り返し質問をしている。

ウ 自分と相手の意見を比較し共通点を確認している。

エ 話し合いの話題や方向をとらえて助言をしている。

- (3) 結語 とありますが、【お礼の手紙の原稿】の空欄 Ⅱ にあてはまる、拝啓という頭語に対応する結語を、漢字二字で書きなさい。(2点)

私たちは「自然」と言うとき、「手つかずの自然」「自然の脅威」などと表現する。ここにはたしかに、人間の文化の影響を受けていない自然環境、ありのままの動物や植物、山や川などの姿がイメージされているようだ。しかし翻訳研究者の柳父章^{やぶあきら}によると、日本語の「自然」ということは、明治以降に英語の nature の翻訳語として使われるようになって初めてこのような意味を獲得したという。明治以前には、自然という語は「おのずからそうなっているさま、天然のままで人為の加わらぬさま」という意味で用いられていた。この古典的な自然の意味は、「人為」と対置されているという意味で nature と共通している。この共通点ゆえにこの語が翻訳語として選ばれた。しかし、日本語の「自然」はもともと副詞や形容詞として使われ、人為の加わらない「状態」を示していた。つまり、名詞として自然環境そのものを表すようなことはなかった。今でも私たちが使う「自然」ということばには、古い意味と新しい意味が混ざりあっている。私たちは、リラックスした、飾らない状態でテレビに出る芸能人を「あの人は自然体でいい」と賞賛する。その一方で、「手つかずの大自然」「自然の脅威」などという意味での新しい「自然」も、すっかり私たちに馴染^{なじ}んでいる。

つまり、日本のことを考えても、人間の文化の影響を受けていないありのままの自然環境、という意味での「自然」は、西欧からの輸入によって成立している。それはせいぜいここ一五〇年くらいの発明であって、まったくもって「あたりまえ」ではない。一九八〇年代から九〇年代にかけての人類学は、各地の「自然と文化」というカテゴリーに大まかに対応する概念を詳細に検討した。そして、「(人間の外側にある)自然と(人間のつくりだした)文化」という分け方自体が、西洋の文化が構築したものであって、普遍的なものではないということを示していた。

自然に対する分類の多様性というとき、自然を分類する(唯一精神をもった)人間という想定がある。そこには、自然を人間の生活から分離した「手つかずの」実体と見る見方が潜んでいるのかもしれない。はたして誰にとっても、人間以外の種はただ人間に認識され、分類されるのを待っている「考えるのに適した」存在なのだろうか。むしろ人間と動物のあいだに魂の連続性を見る人たちの立場からは、動物は身体の手つとりをつうじて人間と「ともに生きる」存在であり行為主体なのではないか。こうした視点から、

I

ではなく、種間のかかわりあい^①に焦点を合わせる

民族誌が、あらためて今、注目を集めている。

たとえばシベリアのユカギールの狩猟採集民の世界では、人、動物、モノは魂を備え、同じ理性的能力をもつ。それぞれが異なっているのは、種ごとに固有の身体をもっているためだ。狩猟の場において狩人は、獲物であるトナカイの真似^{まね}をして移動し、匂いを嗅ぎ、音を出すことで、同族となって彼らを惹きつけようとする。ただしそこで完全^②にトナカイに変身してしまうと、人間に戻れなくなってしまう(そのような危険な事例もたくさんある)。人間としてのアイデンティティを維持したまま、一時的かつ不完全な状態で動物の身体を身にまとい、その視点を獲得することが重要なのである。

注目すべきは、こうした自然と文化、人間と他種の関係を問いなおすさまざまな最近の研究は、遠く離れた「他者の現実」について語っているのみならず、私たちの社会についても異なるものの

見方を示していることだ。考えてみれば、自然を人間の生活から分離した「手つかずの」^③実体ではなく、人間と他種との具体的なやりとり・交渉の場ととらえるならば、たとえ都市生活のなかでも自然はある。

私たちの多くは、決して自然豊かな環境のなかに住んでいない。また、自然についての体系化された知識をもっているわけではない。しかしそんな私たちでも、具体的な生きものや事物と絶えずやりとりしていることには変わりがない。私たちはペットと情動的な関係を築く。そこで、ユカギールの人たちと変わらず、犬になりきった声真似をして飼い犬を呼んだり、飼い主として自分と犬を差異化したりする。その一方で私たちの生活は「愛せない他者」との関係のなかにもある。たとえば私たちは、ゴミ捨て場に集まるカラスにゴミを荒らされないようにゴミ袋をきっちり縛ったり、新聞紙でゴミ袋の中身を見えなくしたりする。

このように人間が自然をどう認識し、分類するかではなく、種間のかかわりあいという観点から人間と自然の関係を見つめなおす最近の研究は、他者だけでなく、私たちの社会についても語っている。私たちの生活は犬、カラス、など複数種との関係によつてこそ成立する。その複雑な絡み^{から}あいを解きほぐすことは、一つの自然を守る「地球市民」ではなく、多様な動植物や事物とのやりとりのなかでしか生きられない具体的な存在として、みずからをとらえなおすことでもあるのだ。

人類学的に「自然」を問いなおすことは、「私たちの自然を守ろう」といった抽象的な環境主義のスローガンを超えて、他の多様な生物、モノと私たちの日々の具体的な関係に目を向けることである。そうした視点は、「自然保護」「多種共生」という美しいことばではとても表現できない、私たちと多様な存在の緊迫した関係をもクローズアップする。

そもそも現代社会において、花粉症、鳥インフルエンザなど他の生きものの由来のウイルスは、すでに私たちの日常生活を脅^{おびや}かしている。私たちは冬にはインフルエンザワクチンを接種し、うがい・手洗いを徹底するように言われ、春になるとムズムズする鼻を押さえてマスクを着け、目薬をさす。そのようにして他種から必死で身を守りつづけることでしか、私たちの生活は成り立たない。だからこそ「自然との共存」は今や遠く離れた美しい「自然」を「地球市民」という特権的な地位から守ることでなく、私たち自身の生存にかかわる他種との緊迫した関係である。つねに具体的な自然と人間、種間の関係に注目してきた人類学の研究は、こうしたより日常的で差し迫った「環境問題」に目を向け、^④問いを生みだすためのあらたな視角を与えてくれるはずだ。

(松村圭一郎ら編著『文化人類学の思考法』により、「1 自然と知識—環境をどうとらえるか?」〔中空萌執筆〕による。一部省略がある。)

(注) ※カテゴリー……区分。

※アイデンティティ……独自の性質や特徴。

問1 日本語の「自然」ということはとありますが、この説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 「自然」は 古典的な意味においても、明治以降の英語の nature の翻訳語としても「自然環境」そのものについて用いるという点では共通している。

イ「自然」は、明治以降に英語の *nature* の翻訳語として使用されるようになって初めて自然環境そのものを表す副詞や形容詞としての意味を獲得した。

ウ「自然」は、明治以前には人為の加わらない「状態」を示したが、「人為」と対置されているという意味で英語の nature と共通しており、翻訳語として選ばれた。

工「自然」は、明治以降に英語の nature の翻訳語として、副詞や形容詞として人為の加わらない「状態」を表す意味での使われ方が主流となっている。

問2 本文中の空欄

I

 にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 他の種を認識し、分類する人間の知識
イ 人間と動物のあいだの魂の連続性
ウ 動物と人間との身体をつうじての交流
エ 人間と他種との具体的なやりとり・交渉

問3 完全にトナカイに変身してしまうと、人間に戻れなくなってしまう。とありますが、筆者の述べるユカギールの狩猟採集民がこのように考える理由について次のようにまとめました。次の空欄にあてはまる内容を、魂、固有の二つの言葉を使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

ユカギールの狩猟採集民は、人間や動物が

と考えるから。

40

30

と考えるから。

問4 たとえ都市生活のなかでも自然はある。とありますが、筆者が考える都市生活のなかの自然について具体的に説明した文として適切でないものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 自然に関する体系化された専門的知識を得るため、インターネットで調べることに。

イ 飼い主が、犬の声真似まねをして飼い犬を呼んだり、自分と犬を差異化したりすること。

ウカラスにゴミを荒らされないため、ゴミ袋を縛ったり、中身を見えなくしたりすること。

地球市民として「私たちの自然を守ろう」という環境主義のスローガンを掲げること。

花粉から自分の身を守るために、マスクを着用したり、目薬をさしたりすること。

問5 ④ 問いを生みだすためのあらたな視角を与えてくれるはずだ。とありますが、人類学は、どのような視角を与えてくれると筆者は述べていますか。次の空欄にあてはまる内容を、普遍的、具体的の二つの言葉を使って、四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

く
れ
る。

45

55

と
い
う
視
角
を
与
え
て

という視角を与えて

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です) (12点)

※だいさいもん ※じやうとうもん
大斎院より上東門院、

※じやうとうもん
り上東門院、

「つれづれ慰みぬべき物語やさぶらふ。」と尋ね参らせさせたまへりけるに、
退屈を紛らすことができる物語がございますか

（上東門院は）紫式部を召して、「何をか参らすべき。」とおほせられければ、

「何をか参らすべき。」とおほせられければ、
何を差し上げたら良いでしょうか

「めづらしきものは何かはべるべき。新しく作りて参らせたまへかし。」と申しければ、
 何がございましょうか、いや、ございません

何がいざいまいしょうか、いや、いざいまいせん

「作れ。」とおほせられけるを、うけたまはりて、[※]『源氏』を作りたりけるとこそ、

いみじくめでたくはべれといふ人はべれば、また、いまだ宮仕へもせで里にはべりける折、
すはらしく

まだ宮中にお仕えもしないで

かかるもの作り出でたりけるによりて、召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたりとも申すは、いづれかまことにてはべらむ。

(『無名草子』むみょうそうしによる。)

(注) ※大斎院……村上天皇の娘。選子内親王。
だいさいみん

※大齋院……村上天皇の娘。選子内親王。
※上東門院……一条天皇の中宮藤原彰子。

※『源氏』……『源氏物語』のこと。

問1 いふ人はべれば ひと とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。(3点)

問2 ① 新しく作りて参らせたまへかし。 は「新しく作って差し上げなさいませ」という意味ですが、物語を新しく作ると考えたのは、どうしてですか。次の空欄にあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。(3点)

退屈を紛らす物語として

から。

問3 ② 申しければ の主語として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 大斎院 だいさいいん

イ 上東門院 じやうとうもんいん

ウ 紫式部

エ 作者

問4 ③ いづれか とありますが、ここでは何と何のことを指していますか。次のア～オの中からあてはまるものを二つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 作者が、紫式部の書いた『源氏物語』に高い評価を与えているということ。

イ 『源氏物語』を書いたことで宮中に召された女性が、紫式部と呼ばれたこと。

ウ 紫式部が、『源氏物語』を書いたことにより宮中から出されてしまったこと。

エ 紫式部が、『源氏物語』を書いた動機については不明であるということ。

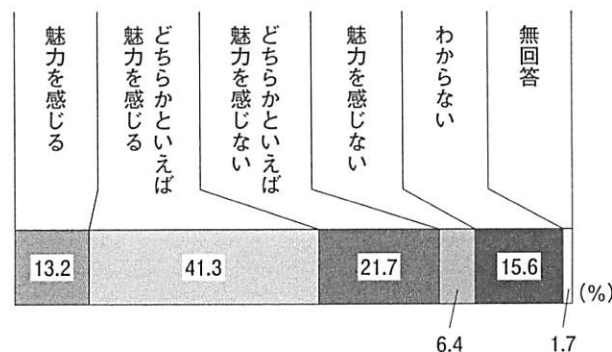
オ 紫式部が、上東門院の求めに応じて『源氏物語』を書いたということ。

5

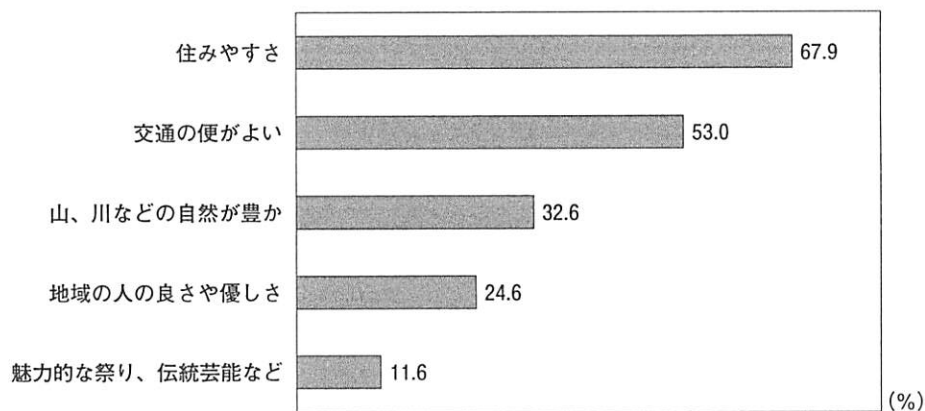
次の資料は、「埼玉県の魅力」について、県内在住者を対象に調査し、その結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料をもとに「地域の魅力」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。(12点)

資料① 埼玉県に魅力を感じるか



資料② 埼玉県で魅力を感じるもの 上位5項目(複数回答)



(四捨五入による端数処理の関係で、資料①の合計が100%になりません。)

埼玉県『平成30年度埼玉県政世論調査報告書』から作成

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わります。)

[illegible]

得点
※

受 検 番 号
第 番

(ここには何も書いてはいけません。)

(切りはなしてはいけません。)

5

受 検 番 号
第 番